
魔法少女まどか マギカ～ほのぼのアフター?～

icsbreakers

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ〜ほのぼのアフター？〜

【Nコード】

N7433V

【作者名】

icbreakers

【あらすじ】

冬のある日、風邪をひいたさやか。
そんな風邪っぴきさやかの一日。

（前書き）

ほのぼのストーリー第一弾。

今回はさやかと杏子に視点をあててみました。

「38度……こりゃ完全に風邪だわ」

体温計を放り投げ、美樹^{みき}さやかはベッドに倒れこんだ。

「魔法少女でも風邪なんてひくんだ……」

痛覚を消す感覚で感覚操作を行えば、頭痛やだるさは消せた。

だが風邪をひいていることには変わらない。

このまま学校に行けばクラスメイトにうつしてしまうだろう。

「今日は休もう……」

両親は仕事で居ないため、さやかは仕方なく自分で学校に連絡した。

一応、親友である鹿目まどかにもメールで休むことを伝えた。

「はあああー。暇だなー」

仰向けになって天井をぼーっと見つめた。

感覚を操作しているので身体自体は普段と変わらない。

「私は元気だっと思ってても何も出来ないなんて……不憫すぎるわあ」

さやかは近くに置いてあったゲーム機を手に取り、電源を入れた。

「……………」

ゲームがスタートするまで約2分。

「よし、双剣使いのさやかちゃんがいつちよ狩りまつくちやいますかね。」

ザシュ！ザシュ！

「……………」

テレッテレ〜♪

「よっしゃあ！さっすが双剣使いさやかちゃん！」

ブチッ！

さやかはゲームの電源を落とした。

「1人でやって何が面白いんだか……………はあ〜」

『おい』

「ん？この声は……………」

さやかは窓を開けた。

「やつほ」

「なにやってんのよ、バカ杏子!!」

「なんだよ、せっかく見舞いに来てやったのに」

「アンタが？」

「アタシじゃ悪いかよ」

「……まあいいや。上がりなさいよ」

「おっじゃましま」す

佐倉杏子（さくら あんこ）はジャンプして二階の窓からさやか（さやか）の部屋に上がりこんだ。

「アンタ、なんで私が風邪だって知ってんのよ？」

「まどかのヤツから聞いたんだよ。んで、どうせ暇してんだろーな
って思ってたさ」

「……」

まさにその通りだったため言い返す言葉も見つからなかった。

「そっぴやさやかなの部屋来たの初めてだな」

杏子はポッキーを咥えながらさやかなの部屋を見渡した。

「そんなに見ないでよ。あつ！アンタお菓子落とした！！」

「わりい、わりい」

全然悪びれる様子もなく、落としたお菓子のカケラを拾った。

「はあく。アンタといると余計熱があがりそうだわ」

さやかはベッドに腰掛けた。

杏子も適当な場所に腰を下ろした。

「そういえば、まゆちゃんは？一緒じゃないの？」

「まゆ？ああ、アイツなら織莉子んとこさ」

「織莉子さん？なんでまた？」

「勉強教えてもらってるんだよ。アタシと居たんじゃ学校なんて行けないからさ」

「……」

「なんだよ、しんみりするなよ。らしくないぞ」

「私だって感傷にくらいひたるわ！」

「へへ。おつとそうだ」

杏子は持ってきた紙袋からリンゴを取り出した。

「風邪つつたらこれだろ？食うかい？」

「アンタまた！！」

「安心しろつて。ちゃんと買ったもんだからさ」

「買ったつて……お金はどうしたのよ？」

「そりゃあもちろん働いて稼いだに決まってるだろ」

「ん〜。わたしや耳が遠くなつたのかぁ！？なんて言つた？もう一度言つてみておくれ！？」

「ちょーうつぜー。だから稼いだんだつて」

「なん……だつ」

「なんでそんなに驚くんだよ」

「意外だつたからに決まってるでしょ！で、何の仕事よ？」

「何つて言われると……ん〜」

杏子は腕を組んで考え出した。

（考えなきゃならない仕事つてなによ……）

「何でも屋？かな」

「はい？」

「なんでもやるから、何でも屋」

「なにそれ……」

「ほらさ、アタシってぶっちゃけるとホームレスじゃん。だからバイトなんて出来ないし。でも魔法って力はあるからさ。なら魔女の影響受けて悩んでるヤツの悩みを解決して、お金をもらっちゃおうって思っただよ」

「まあ確かに魔女相手にできるのは魔法少女だけだしね。だからって商売にする？」

「いいじゃん。無職よりはさ。で、食うのか？」

「あ、うん。食べる」

「ほらっ」

杏子はリンゴをさやかに投げ渡した。

リンゴは綺麗に弧を描き、見事さやかの手の中に落ちた。

「アンタ病人の私にこのままかじっていつの？デリカシーがないわねえ」

「そんな食えないもん持ってたどーすんだよ」

杏子はリンゴを丸かじりしながら言った。

さやかはため息をついて同じようにかじった。

それからしばらく何てことのない会話をして過ごした。

そうしているうちに時計の針は16時をさしていた。

「しかし寒いなあ」

杏子はふとそう言った。

「そんな薄着してるからでしょーに」

さやかはカレンダーに目をやった。

「もう12月か……。アンタと出会って、ワルブルギスの夜を倒して、だいぶ経ったね」

「ほんとにな。あん時アタシが助けてやらなきゃ、さやかは死んだな」

杏子は最後の一本となったポツキーを口に放り込んだ。

「そうだね、何だかんだでアンタには助けてもらってばかりだね。感謝してるよ」

杏子は口を開けたまま固まってしまった。

「な、なんだよ。らしくねーじゃん」

そういつて顔をそらした。

「恥ずかしがってるの？かわいいやつめ！」

「からかうんじゃないよ。ったく」

「へへーんだ。でもほんと寒いわ」

さやかは布団の中にもぐりこんだ。

「うーん、やっぱりマイベッドは気持ちいいね」

「あーさやか、ずるいぞ！」

「えっ！？ちょー！」

杏子は無理やりさやかのベッドの中に潜り込んだ。

「ほんとだ、あつたかいな」

「ちよつと杏子！出なさい！せまい！」

「いいじゃん。減るもんじゃないし」

「アンタが使うと減るのよ！」

「いて！さやか、今蹴ったな！お返しだ！」

「え……っ！アハハハハハ！」

杏子はベッドの中でさやかを思いつきりくすぐった。

「ちょ！わかった！ギブ〜！」

「わかればいいんだよっ」

「私、病人なんだからもう少し気を使って欲しいわ〜」

「どれどれ？」

「！！？」

杏子は自分の額をさやかの額に当てた。

「もう熱さがったんじゃん？顔赤いけど」

「わかったから！あとで計ってみるよ！」

さやかはそうやって無理やり杏子を引き剥がした。

そして深呼吸して仰向けになった。

（なんでアタシドキドキしてるんだか……）

横目で杏子を見た。

杏子は一人でベッドの感触を堪能していた。

（はじめは絶対に仲良くなれっこないって思ったけど、何だかんだで気があうんだよね。それに杏子は杏子で色々苦労してるんだろう

し……)

「ねえ、杏子」

「ん？」

「アンタ私のことどう思ってるのよ？」

「はあ？なんだよ、急に」

「何となくよ」

「友達だと思ってるよ」

「！」

杏子の口から出た友達という言葉は何だか特別で、むずがゆく感じた。

「さやかはどう思ってたんだよ」

「私は——」

ピンポーン。

玄関のチャイムが鳴った。

「ちょっと出てくる！」

さやかは駆け足で玄関に向かった。

そして玄関用のテレビ画面に移った訪問者の顔をチラッと見てすぐに玄関を開けた。

「あ、さやかちゃん！風邪大丈夫？」

「わざわざ来てくれたかあ。さすがは私の嫁だなあ、まどかは！」

「その様子なら大丈夫そうね、さやか」

「あ、ほむらも一緒か」

「……ついで見たいな言い方はよくないと思うわ」

「まあまあ、さやかちゃんに悪気はないから……」

鹿目まどかは苦笑しながら暁美ほむらに言った。
かなめ あけみ

「気にしてないから大丈夫よ」

ほむらは自分の髪をすくい上げながらそう言い放った。

「あはは。さやかちゃん、明日は学校これそう？」

「まあね。立ち話もなんだし、上がっていきなよ」

「えーでも、さやかちゃんに負担かけたら悪いし……」

「大丈夫だって。ささ、あがりたまえ」

さやかは2人分のスリッパを出して、2人を中に促した。

「じゃあお言葉に甘えて……おじゃましませう」

「邪魔します」

さやかは2人が上がったのを確認し、リビングに通した。

「杏子も来てるのよ。呼んでくるから待ってて」

「やっぱり杏子ちゃんも来てたんだ。わかった、ここで待ってるね」

さやかはまどかの笑顔に見送られて再び2階に上がった。

「杏子？つて、ありや」

さやかは自室の扉を開け、杏子の姿を見て苦笑した。

「まったく……ほんとデリカシーないなあ」

杏子はさやかのベッドの中で熟睡していた。

いつものとがった感じは無く、どこにでもいる子供の寝顔だった。

「杏子、私もアンタのこと友達だと思ってるわよ」

そう寝ている杏子に囁きかけ、さやかそつと扉を閉めた。

（後書き）

次回も冬のお話の予定です。

よければまた見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7433v/>

魔法少女まどか マギカ～ほのぼのアフター?～

2011年10月9日13時00分発行